KSKQ ゆうとおん 通信

NO.107	2018 年１月号	郵便振り込み口座　00910-9-106532
編集人　（社福）ゆうとおん　ゆうとおん編集員会　八尾市久宝園 2-30-4		

一九九一年　九月三日　第三種郵便物承認　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行　定価５０円

あけまして　おめでとうございます

旧年中は、大変お世話になりました。
今年も、ゆうとおんを
どうぞ　よろしくお願いいたします。

２０１８年　元旦

ゆうとおんの思い

活気があるけど　ゆったりしていて
真剣だけれど　かたくるしくなく
とりあえず　そこにいれば
心と体がホッとする
どこにでもありそうで
どこを探しても　なかなかみつからない
そんなしごとばをつくりたい
ひくつにならず　ごうまんにならず
小さなちがいにとらわれず
小さなことも　ないがしろにせず
失敗も　たくさんして
どんどん　じゆうになっていきたい

一九九六設立

目次

・新年のごあいさつ　……2
はーと　山本　寿
ほーぷ　富澤　久美子
うえーぶ　福井 志朗
・ここで生きる№４　……4
中矢 将仁 / 島袋 美紗子
・わたしの体験　……5
青山 祐二
・虐待を考えるⅡ　……6
堀 智晴
・ピープルファースト広島大会
松尾 卓也　……8
・当世作業所事情　……10
畑 健次郎
・リレーエッセイ２　……12
岩切 智子

新年、明けまして おめでとうございます。
今年もよろしくお願いします。

いつもと変わらない安心感を大切に

はーとの昨年を振り返ると、日々変わらない日常の風景になぜか安心感を覚えたり、支えられたりした一年でした。残念ながら職員は慣れた頃に色々な事情で職場を離れ、そしてまた新たに職員が入ってくる。昨年もお馴染みの光景が繰り返されました。その度にメンバーたちの心に小さなかさぶたができ、時間とともに治っていく…そしてきっと強くなっていく感じがします。「自分たちの居場所」があり、「自分たちのなすべき仕事」があり、そしてかたわらに一緒に働く仲間がいる、それが日々変わらない「はーと」での日常。事務所で座っている私に、時々大きな声が聞こえてきます。笑い声あり、励ます声あり、時に涙声あり、怒声あり。その声々に今日もいつもと変わらないという安心感を覚えて少し“ほっと”します。今年もそんな「はーと」の日常を大切にしていきたいと思います。

（山本　寿）

ゆうとおんはーと

課題はいつでも満載。だから、今年も元気で笑っていこう！

ほーぷが、産声をあげて１年９カ月。まだまだ、よちよち歩きですが、いろんなことがありました。ベテラン職員が退職し、次々新しい職員が入り、そのたびに、また、一から関係づくりが始まる。メンバーさんや、親御さんから不安の声も聞かれました。また、上は８４歳から、下は１７歳まで幅広い年齢層に、はたまた、いろんなこだわりを持つ人たち。パニックのある日もあり、メンバー同士でぶつかる日もあり。２階の作業室、１階の作業室、パンや豆腐の配達に学校販売と毎日目の回るような日々が過ぎ去っています。そんな中でも、マイペースを貫くメンバーさんや笑顔で癒してくれるメンバーさん、仕事をすっかりマスターして頼りになるメンバーさん、メンバー同士の新しい友達関係などなど、大変な毎日の中でも、ほっこりと私たちに笑顔や元気を与えてくれるほーぷです。それぞれのニーズにどこまで、どんなふうに応えていけるのか、メンバーや、家族の高齢化に対して、みんなのお給料をどうＵＰさせていくかなど課題は満載ですが、とにかく、今年も元気で笑える毎日をみんなと一緒に過ごしていきます。

（富澤　久美子）

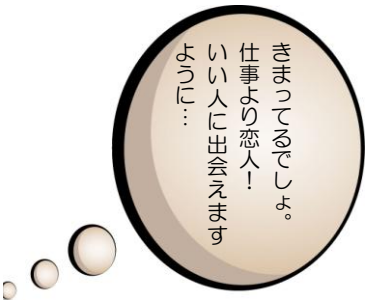
地域との交流を深めたい

新年あけまして おめでとうございます。
今年もよろしくお願いします。

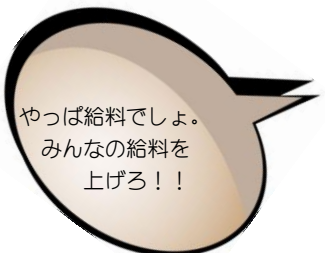
「ゆうとおんうぇーぶ」は 2008 年の 9 月に開所、今年で 10 年の節目を迎えることになりました。いまや開所当時を知らない職員がほとんどです。私自身も「ゆうとおんうぇーぶ」に来て 3 年ほどですので当時を知りません。

しかし 10 年の月日が流れる中では色々な出来事があっただろうと推察します。良いこともあれば悪いこともあったと思います。数年前まで「ゆうとおんねん祭」がうぇーぶで開催されていました。一度だけ参加したことがあり、にぎわっていた印象が記憶に残っています。先日この地区のふれあい祭に出店しました。私の予想以上に「ゆうとおんうぇーぶ」を知って下さっている方が多数おられ、10 年で確実に「ゆうとおんうぇーぶ」は地域に根ざしたと思いました。これからの 10 年は、そのことを地域に還元しながら地域との交流を深める 10 年にしたいと思います。「ゆうとおん」に関わる全ての人たちが八尾という街の中で、毎日笑顔で暮らせるようにこれからも小さなことを積上げていきたいと思っています。皆様にとって良き 1 年となりますように心から祈念いたします。

（福井　志朗）



ゆうとんうえーぶ



ゆうとおんほーぷ

…それは、かなりむずかしい問題やね

ここで、生きる

人シリーズ　№4

中矢 将仁（なかや・まさのり）

1991年、東大阪市生まれ。
ゆうとおんとの出会いは支援学校の実習。演劇や音楽活動が好きで、自分が楽しむだけでなく周りに声かけして一緒に楽しむことを忘れない。趣味はボーリング。26歳。

ゆうとおんうえーぶに来たんは、支援学校の実習で。その時クッキー作ってん。おもしろかった。そんで、うえーぶは、家から歩いて3分やし、ここにするって、自分で決めた。クッキーの作業は、丸めたり、袋詰めしたりいろいろしてるけど、やっぱり販売のほうが好きかな。いろんな会社に行って、お昼休みに売る。お客さんに試食をすすめて「いかがですか～」って言うねんけど、これが好きやねん。

それから、作業所に見学の人が来たりしたら、「これです」と説明したり、「こっちですよ」と案内するのが好きかな。ゆうとおんのバンド活動も好きで、カホーンをやってる。毎年、天王寺の「應典院」や「みんなの家」で発表会やるねんけど、すごく楽しい。それと演劇活動も好き。

いま、好きな人いてるねん。その人、かわいいねん。紙に好きです、だんなは俺でどうですか、って書いて渡した。結婚したいし、ご飯つくってもらいたいし、赤ちゃんもほしいなぁ。できるかなぁ。したいなぁ。そうや、携帯、買います。メールしたいもん。いまは家族といっしょに住んでて、仲好し家族やねんけど、家を出るときは、結婚して二人で住むねん。うん、もう決めてる（笑）。

■聞き取りを終えて

話を聞き始めると、いつも冗談で笑わせる中矢さんが緊張でガチガチ。なかなか口を開いてもらえませんでした。メンバーや職員が休むと「無理したらあかんで」と優しい気遣いをしてくれる中矢さん。かと思えば、「クマ！」と男性職員を呼んで笑わせるお調子もんの面も。

仕事は大好きで熱心で、クッキーの宣伝もぬかりなく、歩く広告塔のような人です。人と仲良くなるのがとてもうまくて、冗談にツッコミ、中矢さんのまわりでは笑いが絶えません。周囲を自然になごませる中矢さんは、うえーぶになくてはならない人です。それにしても、かわいい女性には、だれにでも「好きやねん」って言ってませんか？　ちゃんと見てますよ。

（聞き手　島袋 美紗子）

わたしの体験

「きめる会」では、つらかったことや、うれしかったことを、みなさんに聞いてもらうために、これまでの体験をまとめました。こんかいは、青山祐二さんです。

■働きはじめて

ぼくは、養護学校を卒業してから 2006 年まで働いていました。養護学校の３年生のときに会社で実習をしました。卒業してからそのままその会社に就職しました。家族でやっている小さな会社で、僕をいれて４人ほどが働いていました。

仕事は、ＣＤ－Ｒを包装するビニール袋の加工なんかをしていた会社で、ぼくは紙切りや原単運び、配達の手伝いをしていました。調子がいいときは自分でも、てきぱきできますが、波があって、調子が悪くなると、頭の回転が悪くなってしまいます。

工場は、個人の家のような感じで、社長や社長の息子さんから「早くしろ！」って言われたり、どなられたりしました。両方から、なんども、どなられたり悪口を言われました。息子さんは３０代後半で、たたかれたこともあります。「さっさとしろや！」とか「さっさと辞めろや！」と偉そうに言われたりしました。社長には、はさみで頭をたかれました。

■がまんしていた

でも、ぼくは、我慢しました。耐えていました。味方になってくれる人はいませんでした。初めのころ、給料は5万円くらいありました。給料は、お母さんにわたして、使うぶんだけお小遣いとしてもらっていました。でも、給料がだんだん少なくなって、やめるころには１万円くらいに減っていました。ぼくは会社を休んでいないのに、なんで１万円かなと思いました。

会社で たたかれたり、どなられていることは、学校のときの先生には相談しなかったと思います。でも、友だちと 親には言いました。お母さんは「そら、あかんのちゃう」と言ってくれました。ぼくは、この会社で５年ほど働いてから、やめました。

シリーズ2

虐待について考える
本人にきくことからはじまる
ー障害者虐待についての全体研修からー

堀　智晴
インクルーシブ（共生）教育研究所

昨年の10月26日に、障害者虐待についての全体研修を行いました。その時の感想をもとに考えたいと思います。

堀　智晴（ほり・ともはる）
１947 年生まれ。長い間、障がいのある子どもの保育、教育について、現場の保育者や先生と共同研究に取り組む。「今は、学校卒業後に、障がいのある人が地域の中でどう生きていけばいいのかについて考えています。みなさん、一緒に考えましょう」。インクルーシブ（共生）教育研究所代表。ゆうとおん理事。

1．何事も、本人にきくことからはじまる

まず、前回のアンケート調査の結果の概要を報告して、話し合いました。

ゆうとおんで働いているのに、ゆうとおんの理念を知らないという人がたくさんいました。そこで、畑さんの「ゆうとおん設立の思い・メッセージ」を紹介しました。その中に、「小さなことも　ないがしろにせず　失敗もたくさんして　どんどんじゆうになっていきたい」とあります。

虐待の問題も同じようなことが言えるのではないでしょうか。研修の感想の中に、「自分は虐待と思っていなかった。しかし、気づかないうちに虐待をしていた」というのがいくつもありました。

虐待が恐ろしいのは、暴力をふるうという「身体的虐待」と同様に、利用者のためにと思ってしていたことが、実は「心理的虐待」であったかもしれない、ということがあるからです。

たとえば、よくあることですが、利用者の人がもっと仕事をしたいと思っていても、無理をしないでいいよ、このくらいでいいよ、と仕事を打ち切ることがあります。また、逆に、もう今日は仕事をしたくないと思っているのに、もう少し頑張ろうと頑張らせることです。

いや働いているのだからそんな勝手なことは認められない、とつい考えてしまいます。本人の意向を確かめずに職員が勝手に決めてしまっていることが問題なのです。これは心理的虐待といっていいかもしれません。

２．わたしたちを抜きに、わたしたちのことを決めないで

まず、本人にきくこと、このことを障害者権利条約では、最も重要なことの一つとして宣言しました。つまり、「当事者主体」という原則です。

長い間、障害のある人は、自分の思いを尊重されてきませんでした。自分の思いや考えを持っているのにそれが無視されてきたのです。この人たちは、考える力がない、分かっていない、だから、私があなたたちのために考えてあげるよ、決めてあげるよといって、親や先生や職員や専門家が本人の代わりに本人のことを決めてきたのです。

自分のことなのになぜ自分で決めていけないのでしょうか。こんな理不尽なことはありません。しかし、このことが長い間続いてきたのです。いや、いまも続いているのです。

みなさん、このことを自分のこととして考えてみてください。そうするとこの「他者決定」がいかにひどいことか分かるのではないでしょうか。

障害者権利条約は、国連でつくられた条約の中で、はじめて障害のある人本人が作った条約と言われています。障害者権利条約の内容を話し合う時に、世界から障害のある人たちが集まって、議論に参加して意見を述べたのです。日本からもたくさん参加しました。これは画期的なことでした。

子どもの権利条約は、１９８９年にできましたが、その作成に子どもたちが参加したということはありませんでした。

３．本人にきくことは、なかなかむつかしい、しかし、おもしろいかも！

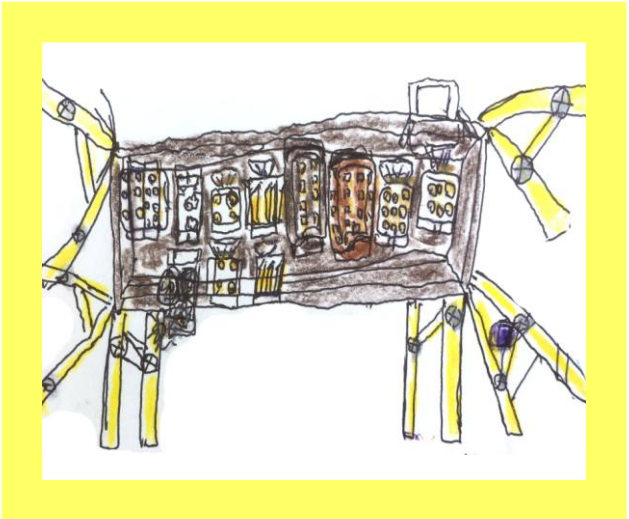
ところで、本人のことだから本人にきくことは当然と言えば当然なことなのに、意外とむつかしいのです。つまり、本人にきくことを忘れてしまうのです。それは長い間だれもかれもそうしてきたからです。障がいのある人自身も、自分の意向を聞かれたことがないので、他人に決めてもらって当然、つまり他人任せでいいと思い込んでいることがほとんどなのです。

だから、本人に確かめないこと、それは大、大、大失敗なのだということにまず、気づくことが肝心なのです。

そこで、畑さんが言うように、「失敗もたくさんして　どんどんじゆうになっていきたい」ということになるのではないでしょうか。

そうか、本人はそのように思っていたのか、そのように考えていたのか、このことに気づくのは実は面白い発見なのではないでしょうか。そして、これまでの自分の思い込みをうち破ってくれるのではないでしょうか。つまり、じゆうになっていくことでもあるのだと思うのです。

（続く）



絵：福島　正人

2017年11月25日・26日　広島国際会議場

第23回「ピープルファースト大会 in 広島」に参加して

「わたしたちは、障害者である前にひとりの人間だ。」という理念のもと、「自分たちのことは、自分たちで決める。」という当事者のあたりまえの権利を求める、当事者による運動である「ピープルファースト」の全国大会が広島で開催されました。

（松尾　卓也）

全国から600人が参加

全体会。各団体から活動報告

私自身が参加するのは、2年前の兵庫大会以来で2度目です。決して私たちのために用意されていたわけではありませんが、前回に引き続き、今回も会場の最前列の中央に陣取ることになりました。

ステージ上では当事者による報告が続き、合間には歌や踊りが披露されていました。生き生きとしている人、緊張で強ばっている人など、最前列からは、ひとりひとりの表情がはっきりと見え、当事者の生の声には心にグッと伝わるものがたくさんありました。ゆうとおんから参加した4人の当事者も何か感じるものがあったように思います。その中で印象的だったのは、1日目の全体会の中で、会場全体で踊りを楽しむ時間があり、全国の実行委員の人たちが、レクレーションの踊りをリードするためにステージ上にあがると、なんとその先頭に、ゆうとおんの山口さんが…。

そして、そのままステージのセンターへ。一体どうなるのかとしばらく見守っていると周りの人たちは何事もなかったように踊りは始まりました。きっと、この日のために練習や立ち位置のことなど、いろいろな積み重ねがあったと思いますが、全く気にとめる様子はありませんでした。

それを見ていた初参加で少し緊張が見られたゆうとおんの徳山さんも立ち上がって会場を煽りながら全力で踊り始めました。そうこうしているうちに会場全体が盛り上がり、とても楽しい空間になっていました。一体自分は何を心配していたのだ

■大会テーマ

○差別・虐待のない社会をつくろう

○困っている仲間のことを忘れず助け合おう

○戦争のない平和な社会をつくろう

■11/25 全体会

講演 「私たちが平和に生きるために
障害者権利条約の役割」
長瀬　修氏
（立命館大学生存学研究センター教授）

報告・「ピープルファースト横浜と神奈川県の動きから」
・「大震災と原発事故のなかで」
・「24 時間裁判と地域生活」
・「成年後見人制度と市役所の仕事」

■11/26 分科会

①生活保護と年金 ②言葉とコミュニケーション
③障害者権利条約と差別がなくなるために
④しゃべろう会 ⑤今は本当に平和か考える
⑥戦争反対 ！ ⑦ピープルファーストって何だろ！
⑧私たちは発信する！パンジーメディア ⑨自分の歴史を話そう！⑩元気が出るはなし！自信がどんどんわいてくる ⑪友だちをつくろう！
⑫津久井やまゆり園事件を考える

ろうかと何とも言えない気持ちになり、山口さんや徳山さんのことが羨ましくもなりました。２日目の分科会で同行させてもらった中西さんも、積極的に他の参加者と名刺交換をしながら交流。自分自身のアピールも歌や趣味の話も全力で表現して会場を大いに盛り上げていました。ピープルファースト大会には、全国からいろいろな当事者が参加しています。会場はどんな集団や集会よりも他者を受け入れようとする空気感に満ちていて、一体なにがそうさせているのか、その答えを問い続けるためにも、今後も参加し続けたいと思います。

２０１８年は、奈良で全国大会があります。今まで参加したことのない人たちとも一緒にあの雰囲気を感じに行けたらと思います。

↑大会実行委にまじって踊り出す山口さん！この時ステージ下の最前列で徳山さんも激しいダンスを披露してノリノリ。

圧倒的な存在感で分科会を盛り上げる中西さん→
閉会式でもマイクを握ってアピール。さすが～。

→「畑さん！寝てる場合じゃないですよ。証拠写真を撮られてますよ」と宮野さん。分科会では東京や静岡の参加者から「一人暮らしガンバレ！力になるよ」とハッパをかけられました。

「奈良大会で会いましょう！」
←閉会式でアピールする徳山さん。

大会の締めは本場の広島焼きで。みんな大満足。

●当世作業所事情69

「おたがいさま」を考える

畑　健次郎

古希という触れ込みにつられて、高校の同窓会にはじめて出席しました。

担任の先生はすでに他界しています。卒業してからもずっと親しくしていた清水はとうに死んでいます。特段、会いたい人がいるわけでもありません。そんな人の輪に入るといつも困惑します。さり気なく気遣いできる人たちのおかげでなんとかその場にいることができましたが、私はみんなの話を、ただウンウンと聞いているだけで、何の能もありません。自分の居場所づくりに不器用な人間の一人であることを、改めて自覚します。

高校の卒業式、当時としては珍しく（？）「君が代斉唱」がありました。歌詞の内容を了解できなかった私は、歌わないと決めていました。しかし私はみんなと同じように起立しました。そして目立たない様に口だけはパクパクさせていました。内心の自由は守ったつもりだったのに、屈辱感が残りました。周りの空気を読んでしまう自分の不自由さが嫌でした。18歳の時の苦い記憶です。

「ゆうとおんの思い」はスタートにあたって、こんな職場になればいいなというイメージでした。

やがて、いろんな人たちがゆうとおんにやってきました。職員に対してはもう少し、具体的な指針のようなものをということで話し合いました。そして左記の４点を職員に提示しました。

・私たちは、当事者一人ひとりのかけがえのない人生を「応援」します。

・私たちは、当事者一人ひとりの違いをたいせつにすると共に、生活年齢を尊重します。

・私たちは、当事者と共にお互いさまの社会を目指します。

・私たちは、当事者と対等の人格を持つ者同士としての関係づくりに努力します。

この間、右記の４点についても解説がなければ分かりにくいという声が出てきました。私個人としてはいちいちの解説よりは、職員一人一人が、自分に引き付けてどう思っているのかを聞きたいと思っています。しかし、そうも言っておれない状況だということも認識せざるをえません。

ゆうとおんは、タテ関係から「共に」という感覚は生まれにくいという点を踏まえて、極力、ピラミッド構造の組織づくりを避けてきました。当事者と共に「場を共有」する者同士としての共感を育んでいきたいと思ってきました。

当事者の人生を「応援」するためには、自分たちがどういう場を共有したいのかという認識が必要です。当事者は「面倒を見る」対象なのか、共に働く仲間なのかというテーゼ（前提）の設定が大事になってきます。私たちとしては、もちろん後者でありたいと思っていますが、現実はそうなっているとは言えません。

今まで何度も当事者への呼称問題を取り上げてきました。昨年度は当事者から「さん」付けで呼んでほしいという要望もありました。その要望に対して、趣旨については了解としつつも、「さん」付け徹底にまでは踏み込みませんでした。今までも何度も言及しているので簡単に繰り返すと、個々人の歴史と関係性を抜きに一律の呼称指定は、それによって得るものだけでなく、失うものもあるので慎重でありたいということが理由です。

しかし、「親しさ」からか当事者を呼び捨てにする職員がいたり、女性職員を呼び捨てにすることが「親しさ」の表現だと思っている当事者の風景を見ていると、規制は要るかも知れないと思ってしまうこの頃です。

職員の虐待問題については堀さんが継続して取り上げていきますが、仕事場や生活の場（グループホーム）の雰囲気によっては当事者間での「虐待」が起きても不思議ではありません。事実、目を凝らせばそうしたことは日常的に起こっています。職員の役割は、当事者との「親しさ」を競う事ではありません。この不自由な人間の心と関係を、どのように解きほぐしていくのかという問題意識をもって環境調整していくという役割を忘れたら「応援」は成立しません。

おギャーと生まれてきた時、赤ん坊は無防備です。自分という存在を意識していません。やがて他者の目に映る自分を通して、自分というものを手に入れていきます。人は他者の中に自分を見いだし、やがて自分の中に他者を見いだします。人も動物も、自分の中に他者を取り込んでいのちをつないできたのかなと思います。与えられた環境のなかで、いのちは精一杯、自分を実現しようとします。人は自分の中に他者を生かすことによって観念を発達させ、自由や平等という概念も手にしました

日曜日、「ダーウィンが来た!」という番組をよく観ます。たいていの動物たちは自分を守り、家族を守り、類を守っていのちをつないでいきます。必要以上に物をため込みません。自分の野望のために殺生を繰り返すことはありません。

人間は器用になり過ぎて、自由の名のもとに途方もない格差を作り出しました。平等の名において、特権階級や抑圧を生み出しました。どんなに贅を尽くしても遣いきれない財力を抱え込む人、自分の欲望のためなら殺戮もいとわない人が世の中にはごろごろいます。

つい先日、福島原発の事故後を撮った映画を観ました。放射能汚染で今まで住み慣れた土地を離れざるを得なくなった人が大勢います。その中の一人に１０２歳の老人がいました。彼は「永く生き過ぎたかな」という言葉を残して自殺します。どこかの首相は「汚染水は完全にコントロールされている」というウソ八百を並べて、オリンピックを日本に引っ張ってきました。私たちは、こんなにも想像力のない人物をいまだに首相に担いでいる国の国民です。

「乏しきを憂えず、等しからざるを憂える」という人としての節度をもう一度かみしめなおすところから、「おたがいさま」ははじまります。

五木ひろしさんが歌っていた「北酒場」というたに、こんな一節があります。「死んで花実が咲くじゃなし　生きて明日があるじゃなし　おれもお前も似たもの同士――」少しネガティブですが、私のイメージする「おたがいさま」はこんなところです。

「おたがいさま」をわかりやすく解説してくれと言われて考えだしたのですが、余計、迷路に入ってしまいました。

２０１６年7月の相模原の事件は、今ではほとんど話題になりません。あの時殺された19人は未だに匿名のままです。

２０１７年のゆうとおんで、最も改善されたのが、この通信の表紙（今号では４頁）です。いつか植松容疑者にも届けられればと思います。そして、一人ひとりのいのちを記号に変えるのは、やっぱりおかしいと思うんやけど、と語りかけてみたい…。

11月25日と26日、ピープルファーストの付き添いで広島に行ってきました。原爆ドームの近くで中年の女性が署名活動をしていました。

「おねがいします」と言われて、私は「はい」と言って署名しました。その時、一緒にいた山口さんに「どうする?」と聞いたら、「するわ」と言って彼女も署名しました。その間、署名をすすめた女性は憲法９条を守ることの意義を熱心に説いていました。山口さんがその話をどう思ったのか、まだ聞いていません。たとえばその署名が「入所施設の拡充を」といった内容だったら「どうする?」とは聞かなかったと思います。「お前も（当事者の）自己決定を尊重してないじゃないか」と言われそうです。

Ｙさんのこと、作業所のこと、移動支援や相談支援、それぞれの領域で待ったなしの課題が山積しています。中でもグループホームの再編は大きな課題です。どんなにバタバタしていても、おたがいさまの気持ちさえあればのりきっていけるはず、というところでちょうどの分量になりました。

２０１８年もよろしくお願いします。

ゆうとおんで働きだして、ようやく４ヶ月が経過した。メンバーさんや家族の方、先輩職員に助けられながら、学ぶことの多い毎日を送っている。

学校を卒業してからずっと「障がい者福祉」の仕事をしている。この仕事が向いているとは思わないが、他の分野で働く自分は想像できない。先日、とある機会にゆうとおんの先輩職員の方々の「仕事」に対する想いを聞く場面があり、自分も自身の仕事に対する姿勢を改めて考えることがあった。そんな中、ふと学生時代を思い出した。

自分が通っていた大学は、京都の山奥にあった。建学の理念に「自由自治」を掲げていたこともあり、学生が主体的に動ける環境があったし、実際に元気で風変わりな学生が多かった。学校内で昼間からお酒を片手に、政治や教育、社会的マイノリティをキーワードに互いに持論を展開し合ったし、そのまま麻雀をしながら宴会になることも珍しくなかった。深夜になっても大学に行けば誰かしら仲間がいた。芸術学部があったこともあり、学内には学生が放置していったヘンテコおかしなオブジェが点在、デッサン用と思われる鹿やクジャクもいた。大学という場所はとても「自由」なところだと思った。

教授と学生の距離が近いこともあり、「先生」ではなく「○○さん」と呼ぶのが慣例だった。どこの研究室も学生のたまり場になっており、私も当時は恩師の研究室に入り浸っては、学業だけではなく食事など生活全般の面倒を見てもらっていた。当時は京都で下宿生活を送っていた。学内にはいるものの、授業を休むことたびたび、単位を落とすことたびたび…という典型的なあかん学生だった。あかん学生ぶりは、恩師にはしっかりバレていて、「ちゃんとメシくってるか？」「まぁとりあえず研究室にこいよ。うまいケーキがあるぞ」と呼び出しの電話がかかってくる。そうしてケーキを食べながら個人面談が始まるのだ。恩師に話を聞いてもらいながら、自分の気持ちに整理をつけたり、モチベーションが上がったり、やっぱり来るんじゃなかったと思ったり…。

恩師の専門は「教育学」、特に「子ども」を取り巻く大人と社会に関心がある人だった。そこから派生して「障害者運動」や「障害児教育」「同和教育」「同和保育」などにも精通していた。当時は私も、自然な流れでいろんな分野に関心を持ち文献を読み、実際に小学校や児童館で活動しながら、教科書だけではわからない現場から学ぶことの大切さを学んだ。常々、恩師は「自分のなかのゆらぎを大事にしろ。そして、目の前の当事者から逃げるな。」と言っていたが、まさに恩師自身がそうであったように４年間、親以上に親身になってもらった。どんなことがあっても学生と向き合い続ける人だった。

こうした大学の校風や恩師の存在が、今の自分の考え方や物事の感じ方のベースになっているのだと思う。恩師の言葉を思い返しながら、自分も目の前の当事者の方と関わり続けたい。（岩切　智子）

一九九一年　九月三日　第三種郵便物承認　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行　定価５０円

社会福祉法人　ゆうとおん

本　　部 / 〒581-0834 八尾市萱振町 2-133　TEL 072-993-0785　FAX 072-993-0784
ゆうとおんはーと / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-68-1　TEL 072-926-6200　FAX 072-926-6199
ゆうとおんうぇーぶ / 〒581-0817 八尾市久宝園 2-30-4　TEL 072-926-1543　FAX 072-921-8883
ゆうとおんほーぷ / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-73-2　TEL072-927-1300　FAX 072-927-1301
スタコラハウス / 〒581-0802 八尾市北本町 1-1-11　TEL 072-995-4387　FAX 072-995-4387
メールアドレス / youtone@live.jp　ホームページアドレス http://www.eonet.ne.jp/~youtone
年会費 / 1 口 2.000 円　振込先 / 郵便為替口座 00910-9-106532

発行人 / 関西障害者定期刊行物協会　大阪市天王寺区真田山町 2-2 東興ビル 4 階
定　価 / 50 円